

---

月 刊

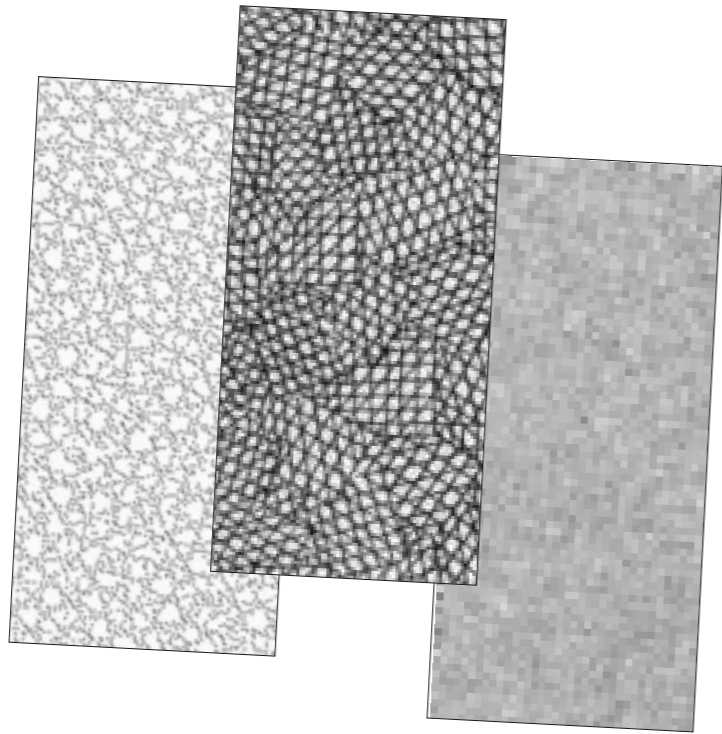
---

# MéLange

---

Vol.158

---



---

2021.1.31

詩と評論

---

月刊「MéLange」

Vol.158, 2021.1.31

「月刊めらんじゅ」編集部



## 海猫堂店仕舞記 ①

千田草介

たしか神戸沖で観艦式が行われたことがあったはずだが、それは何時のことだったのか、紀元二千六百年記念で挙行されたのなら昭和十五年のことだが、と思い、資料をさがしてから神戸へ出かけた。昭和十二年築のわが家の縁側の壁に左官屋が遊び心で描いたらしい海上を飛ぶ複葉機の《こて絵》があつて、物ごころつく頃よりそれをながめて育った私の頭の隅に長いこと引つかかっていたまなものである。左官屋の脳裏にあつた飛行機はいつどこを飛んでいたのか。それはもしかしたら神戸沖上空ではなかったか。

古本屋をのぞいてみよう、元町の高架下を西にむかつてうろついていると、看板も出てなく何を売っているのか正体の判然としない店舗が目に入った。店先の椅子にトラ猫が背をむけて坐っていた。店の中はガラタとしか称しようのない物体であふれ返っている。十ダースほどもある骨だけの蝙蝠傘、五右衛門風呂のゲス板、満鉄の社章が入ったマンホールの蓋、頭部が欠けているながらも他は精巧にして妖艶な女性

の人体模型、二十糎砲弾の凹んだ葉莖、河馬につけるような大きな蹄鉄、瀬戸内海の底から引き揚げられたものらしいナウマン象の歯、輻が三本ばかり折れた大八車の車輪、まず十年は動いていないドイツ製の焼玉機関、「三浦屋」という妓楼のものとおぼしき紅殻色の看板……。店の主人はいないようで、猫が店番をしているらしい。

「観艦式は昭和十一年のことやな」と、訊きもしないのに教えてくれたのは、その猫だった。「昭和十五年には零戦が採用されて飛んだ。十一年ならまだ二枚羽根ばかりや」

ふりむいた猫の顔には見覚えがあつた。「チャンドラか」

元はうちの近所の野良猫だが、明石で拾ってきた子午線を猫まんまに混ぜて食わせてやっただけに東西に歩けない奇病にかかつてしまい、治療のため神戸まで加古川線、神戸電鉄經由でつれてきてやっただけが、五年ほど前のことである。やはり高架下で見つけた小さな舵輪をくつつけて、身体の舵がきくように直してやっただけであるが、そのあと海岸通りを試運転がてらいつしよに歩いていて、はぐれてしまった。「そうか。ここにもらわれて店番しとったか」

「ちゃう」と猫はかぶりをふつた。「わしが経営しとるんや」「経営……おまえ猫のくせして銭勘定でけるんかい」

「馬鹿にすな」憤然と猫が言った。「おまはんが変なもん食わせてくれたせいで、こうやって人語で意思疎通もでけるんや。銭勘定なんぞ朝飯前よ。わしのなかには森羅万象のメートル原器が入ったみたいなんやよつてな」

(つづく)



「月刊めらんじゅ」158号 目次

### 詩・俳句

Mutation 詠(俳句)	岩脇リーベル豊美	6
モデラートカンタービレ	にしもとめぐみ	8
絆創膏/宮	中嶋康雄	9
極相のエチュード	安西佐有理	10
鳥を砕く	大橋愛由等	12
抜け落ちソネット	大西隆志	13
マインド	高谷和幸	14
もらいもの	野口裕	15

### 評論

新連載/「想像力の彼方」①	大西隆志	7
---------------	------	---

### 連載小説

1回目/「海猫堂店仕舞記」	千田草介	3
1回目/「海の見える丘」	高木敏克	4

### 連載エッセイ

〈本のひと皿〉「由緒ただしき『西洋お粥』」	安城位久緒	11
益田っこ通信「正月あいさつ」	元正章	15
神戸詞あしび 146 〈群れ語りの詩学〉—少しづつ壊れていく	大橋愛由等	16

編集部日より★78/2021年が始まってまた緊急事態宣言が発令された。(わたしの住む兵庫県は1月14日から2月7日までの期間)。去年5月の非常事態宣言より規制は緩やかに思えるが、街の様相が一変している。アルコール類を出す飲食店は午後7時がラストオーダーとなり、午後8時には店を閉めなくてはいけない。午後7時といえば勤め人がようやくオフィスを出て店に入ろうかという時刻であり、8時という時間は飲み会も佳境に入ろうかという時刻である。神戸の中心街である三宮の飲食店の多くは、宣言期間中に休業してしまうか、8時閉店を守っている(中には8時を過ぎても営業している店もありそこは満席状態である)。このため、呑むために繁華街に出てきてサラリーマン諸氏はさまようことを余儀なくされ、それでも呑みたい人たちは近くのコンビニで缶ビールを買って、路上で立ちながら飲んでいる。果たしてこんな街の状態はいつまで続くのだろうか。2月7日を過ぎたら夜の街に活気が戻ってくるのだろうか(3月7日まで延長されることが決まった)。昼も夜も、街には不要不急の外出をたしなめる公的機関(県など)の宣伝カーががなり立てている。こうしたプチ戒厳令の布告はどれほど効果があるのだろうか。わたしは隣国・韓国の夜間午前零時の外出禁止の時代(1976年冬)に訪れたことがあり、その緊縛された街の様子を少しばかり知っている。今回の緊急事態宣言の発令は新型コロナウイルス蔓延を防止するためとわかっていても、為政者にとっていざ本当の戒厳令をだす時のシュミレーションをしているように思えてならない。その時の国民はすでに戒厳令に従することに慣れてしまっていることだろう。/今月の「Mélange」例会における読書会は、千田草介氏が、カート・ヴォネガットの『スローターハウス5』を取り上げ「彼が世に認められるまでの苦心惨憺とSFというジャンルとのアンビバレンツな関わり」を語ってもらう。(大橋愛由等)

# 海の見える丘① 高木敏克

連載小説

## 1 水脈の森

わたしが生まれたのはとても古い神戸の山間集落で、林田村惣谷から池田惣町に変わった頃で、地名の通り丘に挟まれた谷間の小さな集落だった。青竹の藪が山麓の地下水脈に沿って茂り、竹藪のなかには井戸と家が隠れていた。竹藪は森に囲まれていて一体となり、水に浮かんだ島のようにも見えた。確かに小さな森の裾と水面との間に闇があった。だから森は闇に浮かんでいた。その闇間は池から畑地まで続いていて、少年たちが笹をかき分けて闇間に入っていくと、森の上から青鷲や白鷲が飛び立ち、森の中では小鳥たち飛び交った。その闇の中には長い時間がエーテルのように閉じ込められていた。鳥の声で再び時間が回り始めるのだ。すると森の中から青空が見えた。それは森の中からしか見えない空色であった。

声はいきなり聞こえてきた。おそらく誰も聞いたことのない声だ。その姿も誰も見たことがないはずだ。このあたりの小森には森の中でだけ生活する老人が身を潜めていた。森には森の主がいることは当たり前前だった。森の主が消えれば森も消えてしまうはずだ。

弟はもう付いてこなかった。森の中では影法師も消えていた。墓石の下には誰かの骨が眠っているはずだ。山の斜面は崩れた段々になっていて墓石は次々に現れた。この墓のことはそのあと誰にも話さなかった。聞かれもしなかったから、この話は昨日のことにように覚えていた。話したことは全て忘れるのだ。

もしかしたら、あれはわたしのお爺さんかもしれないと思った。わたしの祖父と叔父には今も墓がない。祖父は樺太沖で船と共に海中に沈み、その息子は満洲で毒殺されている。そのために二人とも日本には帰ってこなかったのであるが、何処にも墓がない。祖母はいつか帰って来ることを信じて何時までも墓に葬っていないのだ。池の上の古い墓の連なりはおそらく百年ほど昔の村の墓だと思いが、誰の墓だと思つたとたんに墓のない二人のことを思い出したのだ。会つたことない人のことを思い出さうのはあり得ないことだが、思い出したとしたらそれは死霊として彷徨っている人だ。二人はなんとかして家に帰ろうとしている。なんとか思い出してほしいと思っている。あの墓は一体誰の墓なんだろう。お爺さんと叔父さんの墓ならわたしの家族はお参りするはずなのに、誰もあの墓のことを知らないのはなぜだろう。知ってお参りしないのなら、意外な秘密があるのだろうか。となりの千鶴子ちゃんの話の聞くまでは謎が解けなかった。

「百歳のお爺さんは百年前から百歳のお爺さんか

「良き日じゃのう」というのが森の木の挨拶だった。森の中に平らな土地があることはわたしには不思議に思えた。

「この森の木が生えているのはなあ、放置された休耕田の上じゃ、どの木も百年は経っている。」  
そう言う爺さんは百年ほど昔からやつてきたように見えた。なんと挨拶したら良いものか戸惑うのはお爺さんが古い言葉で話すからだ。森は懐かしい土の匂いに満たされていた。お爺さんはスペードの形の鍬で黒い土を耕していた。おそらく自分で食べる分だけの小さな畑だ。だが覗くと黒い土は暗闇に見えた。

それまで鍬を振り上げていたにも関わらず、少し喋るとそれだけで息が切れるらしく、お爺さんは少し足を引きずるようにして深い闇の中に消えていった。お爺さんの去つた後の畑をのぞくと闇に見えた土が動いていた。黒いものは無数の文字だった。それは永遠に読まなかった文字が自然に戻つた土で、お爺さんは大切そうに耕していたのだ。土の下にはまだまだ土に帰りそうにもない本やノートが腐つてゆくのが見えた。お爺さんは何か大切なものを掘り起こすためにそこにきているみたいだった。これは畑ではない、お爺さんはそこに何かを埋めたのだろうかとその時は思った。

闇の行く手は鬱蒼とした樹木に包まれて消えてもしれへん」と、いつもの調子で弟がいった。振り向いてみたが弟はやほりいなかった。すでに弟はその時から僕の影法師になる運命を背負つていたので。

わたしの父は母方の墓は作らなかつた。父は四国からやつてきて未亡人の祖母の娘と結婚したわけだが本来の家長の墓も後継ぎの長男の墓も作らなかつた。その代わりに新しい家長として高木家の墓を作つてから墓石の横に小さな石碑のようなものに名前を入れた。父も祖父の単なる影法師に見える。家の中では死んだはずの祖父の方が存在感が重く、父は軽くて生きていても影法師にしか見えなかつた。

二人の死霊がそこに入つたとは思えない。恐らく入る気はないだろう。かといって祖父は妻と娘を残して山梨県の雨宮家の墓に戻るわけもない。恐らく自分の遺体をさがしていつまでも海の上を彷徨うだろう。そして夜になると山の中も探すのだろう。「きのうそのお爺さんを見たよ」

裏山を勝手に開墾して育てたトウモロコシにかぶりつきながら姉が言った。  
「あのお爺さんは狼山の池の中から出てきたのだ。だからカッパだと思つたけど顔はあのお爺さんだった。ところが服は全然濡れていなくて、幽霊みたい

に森の奥に消えていったんよ」  
「そんなんは夢やと思ふ」とわたしは言い返した。  
「違うわ、幽霊やわ」と弟が言った。  
「あんだ、また狼山に入つたん？ そんな話は、笑

いた。あのお爺さんの家はどこにあるのだろう。誰も教えてくれなかつたので聞きなかつた。  
やがて千の風が吹き夕闇が迫ると狼の遠吠えが聞こえ、森はたくさんの恐竜の群に変わって騒ぎはじめた。集落は怪獣の群れに踏みつぶされた。あとには確かに恐竜の踏み散らかした木の枝がちらばっていた。その上を狼の影が通り過ぎたが、それでもお爺さんは決して森から出てこないのだから何処かに家があるはずだった。

「あのお爺さんはもう百歳なんだから、何でも知っているよ」とわたしは知恵遅れの弟にいった。  
「へえー百年前からお爺さんだったのかなあ」と弟は森を眺めた。

この古い丘では木漏れ日が緑の笹を育てて地肌を隠していた。その中を奥に進んで休耕田から少し登ると、この森にはただ一箇所大きく天空の見える大聖堂のような神々しい場所があった。真ん中に青い池があつたが、今にも消えそうだった。もともと大きな池のあとには木がなかつた。

光の中に霧が立ち上がり様々な昆虫が舞い上がり、それを見つけた鳥達がさらにやつてきた。

それは独り占めにしたカテドラルであり、誰にも教えたくない秘密の世界であつた。

笹をかき分けて元あつた池の外周を一周しようとしたが、木の根や灌木が行く手を阻んだ。やがて足元の石につまずいて倒れそうになった。滑つた苔の中から石の地肌が現れ、かすかに刻まれた漢字が見えた。それは明らかに墓石だった。

われるだけやから人に言うたらあかんよ」と母も言つた。  
狼山には魔物が住んでいるという脅しは昔からあつた。狼だけでは足らなくて幽霊も出てきたのだつた。水脈が残つているというのに狼山の地主は頑として耕作を阻んでいた。きつと地主はなんらかの魂胆を隠し持っているのだという噂が泡のようにあつた。

水脈が切れると丘の上の樹木は枯れてゆく。それをねらつて宅地開発が進み水道が山の水脈に取つて代わる。あちこちの丘の畑は水源を失い笹原に変わつていった。それでもまだ諦めずに井戸を掘り畑地に流している人もいた。多分、彼らは地元の人ではないかもしれない。彼らはほとんど顔も見られることもなく短時間の作業で町に帰つていった。彼らがすぐに帰つてしまうのは多分海が見えないからだ。おそらく彼らは海の見える丘がこのあたりにおると思つてやつてくるのだ。しかし森以外に見えるのは溜池ばかりだ。海の見えそうなあたりにもまた小さな森の丘が続いていた。しかしそれらは町の丘々というべきで、海に面する南側にはしっかりと家が建つていた。家のない丘もあつたが谷の間からすれば早く削り取りたい丘だった。しかし、そこまで行けば丘から海を見ることは簡単だった。半分削られたその丘は桜の咲く公園になつていった。

(つづく)

## ◆Mutation 詠

岩脇リーベル豊美

敬虔信者 人死恐れずと聖体拝領

海底の嶺 民族浄化の波に打つ

狡猾に恫喝 隕石と化す宝石

櫛ライトアップ 目隠し鬼ら集まる

都市封鎖 見たこともない桃色の月

仕事消え時空消えて 変異種現る

ろくな死に方の アフターヴィジョン

肉屋襲撃 寛容を語る不寛容

三川注ぎ出づ 河口の野鳥さえずり

理念なき 仮面舞踏会の幕引き紐

大きなガラスを挟んだ向こう側は雪が降って、あたり一面は白い世界だが、この大きな部屋は暖房も効いていた。余所見している僕の目には現実でありながら映像の中で雪が積もっていくようでもあった。2003年12月に二泊三日で開かれた「秋吉台現代詩セミナー」での一齣なのか、少し曖昧ではあるが、長い間抱き続けていた光景をふと思い出した。五

〇人近い参加者は真摯な詩への向き合い方をしているのに、僕は建築家の磯崎新さんの設計の罫に嵌り込んでいたのか、ガラス張りになっているセミナールームから薄く積もった雪の光景を見ていた。その外側は野外劇場になっていた。余所見をしていたのは、スリリングなトークは耳には入ってくるが、BGMのように心地よかったからだ、と反語的に言える。嫌

が脈打っていることを告げていた。車窓という枠組みをあたえることで、新たな映像の時代を先取りしていたように思う。映画やテレビ等の映像だけではない、フレームのある映像から一歩進めた在り方、と言えるのではないか。想像力をただ持ち上げるのではなく、現実の真相にどう迫っていくか、という在り方と感じていた。セミナーでの余所見から何かしらの思いを綴りながら、安全な場所からの見え方を否定はしないし、僕らの現実とは他者への眼差しには優しいから、真相を捉えることがなかなかできなくなっている。

映像をリアルに感じるのではなく、仮想された現実のもう一方の現実、だからこそゲームに没入できるのかもしれない。現実では血も流すことのある事

を入れ込んで教行引用する。「あすこは何／こは何と／人々が指さすのを聞いていると／風景はすべてある人間の名につながつていた。」とあり、視線の移動がフレームのある眼差しとしての思想の定点を明確にしていた。小野さんの言葉に「見ない喜び」があるがそれは天邪鬼のように真相を迫るやり方のように思う。

想像力の陥穽を再発見させてくれたのは、二〇歳の頃に読んだ酒井雅之著の『アメリカ・ルネッサンスの作家たち』を再読したからだ。チャニング、ボウ、ホーソーン、エマソン、ホイットマン、メルヴィル、それにソーロウを取り上げているが作家論ではなく、「アメリカ・ルネッサンス」の構造を捉えようとしたことを目標にしている。これらの作家たちは強烈な個性と独自の世界を作り上げながら、同時に興行のある世界像を共有している。想像力が壁を潜り抜けることをついに許されなかったメルヴィルとは違ったソーロウについて、酒井雅之さんは「ソーロウは、想像力の独走にはどめをかけ、対象の真相を越えることを想像力に禁じるところまで進み出ることができた。ソーロウが想像力を観念の霧の中から救い出し、本来の位置に据え直したことは、いくら評価しても足りないほどの意味を持つている。想像力が世界に対して本当に有効な力となるには、世界の真相を見届けることから出発しなければならないからだ」と。世界の真相なんてどうなのか、と感じながらも精神が独走する超越論の限界を、ソーローは生涯かけて「世界」と「社会」に拘る、それは僕たちが生活を営みながら文化を創造している場所なのかもしれない。真相探求の在り方と、世界の奥ゆきの中へ、真相を踏まえた想像力の發揮するには、車窓やフレームなりの一歩退いた視線のうちに逆説的に、現実が立ち現れてくるのかもしれない。

## 大西隆志 想像力の彼方に〈1〉

味ではなくセミナールームに流れる真剣さは、外の雪景色に飲み込まれているように僕は感じていた。暖房の効いた部屋と対峙する必要もないが、ガラス張りが崩壊したらと想像し、ガザにとじ込まれている人のことが脳裏に浮かんだ。僕は多くの言葉の中に、手には届かない現実を少しだけだが摘んだ気になりたかった。

それは富岡多恵子さんの小説かエッセイなのかはつきりしないが、車窓から見える風景についての描き方に強く惹かれたからだ。僕が大阪の厚生年金会館に半年程研修に行っていた時か、大阪文学学校に出入りしていた時かはつきりしないが、まだ二〇歳になる前のことだったと思う。富岡さんの文章には車窓の風景の中にあっても、リアルな生活の鼓動

態でも想像の世界ではリセットで復活していく。ゾンビに噛まれる痛みはない、のだがゾンビはある種のウィルスに変身していくようだ。僕はフレームのあることで、リアルを追求しながらも生身の具体的なことには到着できない。そこで返し技として、車窓なりディスプレイなりの一歩引いたなかでの想像力を僕は肯定していきたい。そこには陥穽があるにしても。本来は想像力により、世界を相対化できていたが、僕らの世界はゆつくりと制度化された情報に囚われてしまっている。想像力が万全ではきへのちよつとした定点を自ら選ばなければなら

ない。ここで小野十三郎さんの詩篇「夕暮の川に沿って」

## ◆モデラートカンタービレ

にしもとめぐみ

女は  
秘密を  
一日を  
歩き始めてしまう  
影さして 時移り  
あどけない花が香る  
心も あなたに  
抱きしめられているこの体も

陽をあびて  
葉が狂る狂ると  
舞い堕ちる

風景が一日を溶かし  
死の口づけが  
毒杯を呷らせても

## ◆絆創膏

中嶋康雄

手を洗う  
絆創膏がよごれて黒くなっている  
すこし臭くもなっている  
ふいてもふいても  
ぬれている  
逃がっている  
声が聞こえる  
皮が白くふやけて  
傷の奥がまだ  
支払えと言っている  
目の前の  
すべての食器が言っている  
よくおぼえていないともだちが  
いちばんしつこい  
坂道を自転車がおりにくる  
右へよければ右へ来る  
左へよければ左へ曲がって  
スピードだけはあがつているし  
乗っている人が  
風花みたいにゆれている  
絆創膏の糊がまたとれて

ぶかぶかしている  
冷たいガーゼの部分が  
ひそひそと  
古い血をよんでいる  
よくわからない素姓がはやり  
よくわからない空気が漂い  
ぬすまれた惣菜が  
冷えたまま食べられる  
絆創膏にも  
汗のおいがしみてゆく  
ふとんに落ちる

## ◆宮

中嶋康雄

宮の奥に蛇がいた  
蛇には髭も生えていた  
溜池があった  
昔は泳いだ  
溺れた子もいた  
死んだ子もいた  
蛇が子守唄をうたっていた

池には透明のえびがいた  
網で掬った  
唐揚げにすると美味かった  
塩をかけると美味かった  
池は埋め立てられた  
住宅街の一角になった  
人がぐにやぐにや暮らした  
雨の日になると  
今でもえびがふわふわ  
脱いだ殻をさがしてふわふわ  
死んだ子もふわふわ  
脱いだ服をさがしてふわふわ  
いつまでも  
いつまでも  
白蟻に食われている  
結露の柱  
えびを揚げる  
濡れた子がふるえながら  
冷たい口をぽっかり開けて  
いつまでも待っている  
月あかり  
宮の剥げたかべ  
南天の実を食べた鳥の  
未詳の糞がかわいている

# ◆極相のエチュード

安西佐有理

あれほど美しかったのに、小さな男の亡骸でこしらえたやわらかなレリーフが急激に青ざめ萎んでいくのを椅子の陰へ投げ出して駆けていくと、気体で満ちたりた大柄な女の亡骸である装置がふわふわと踊り、いきものの体温で握手を求めてきた。それは常夏の枇榔の並木が、プラタナスの四季に溶ける細い街路の突き当たりでの遷移である。建物のおもてを飾る鋳物の柵はどれも大ぶりの流線模様で、蔓植物が繁茂した時代を回顧し、再来に備えている。ここに、祖母の家もあった。朽ちかけても変わらず息をして育つ家のなかで、かつて鏡台であった懐かしいオルガンを開き、乾いた肋骨ほどの鍵盤をはずして、抽斗に収められた何枚も の鱈甲の板をとりだしては、天井だったあたりの外光にかざす。(同時に見つけたあわい水色とピンク色のウサギの文字盤の腕時計は電池を交換すればいつか遊びに来る幼い子が使うはずだと、修理屋の営業時間を考えながら。)

この空気のことには知っている、と思う。死んでいった人の数か、名前だけが舞い込むうちにも、人を生きた気配は森林のどこかにしまわれていくのが日課であった。夜明けの鳥を探した山裾の道の脇では首を吊っている人がいたことさえ、後から聞かされたのだ。あの林道の、強い光を好んだ陽樹は、もう入れ替わった頃だろう。館色に透かし見る、よわい陽ざしをやさしく濁す斑点が音符だと気づいた、瞬間。鍵盤に代わって歌いだそうとしている。わたしもまた遷移のなかで収束していくのは、もうじき川沿いに夜を照らして、歩行者にも空や海の旅人にも合図する、いつもの塔の街のあかりと同じぐらい明晰な夢であるという曲を。

## 本のひと皿

由緒ただしき「西洋お粥、

安城 位久緒 Anjo Ikuo

何世紀も食卓に乗りながら、これほど「まずい」「貧しい」とマイナスのトッピングで覆われた、不遇な食べ物のはめずらしい。

ポリッジ (porridge)。英語で「粥」の意味で、主には挽き割りや圧延などの加工をしたオーツ麦(燕麦)を、水や牛乳で煮たものを指す。アメリカ英語式に言えば、オートミール (oatmeal) である。

「慰めの言葉は、王には冷めたポリッジだな」。シェイクスピアの『テンペスト』の台詞だ。大嵐で孤島に漂着して意気消沈するナポリ王。老顧問官が回りくどい言葉を並べてなだめる横で、王の弟が嘲笑的に独白する。たしかに、半端に冷めるとまずい。オーツ麦のお粥がとろんとして固形とも液体ともいいたいところに、貧民救済・病人見舞いの食べ物としても使われたイメージまで、ふりかけられたのはやむをえない。

古代ギリシャやローマでは、お粥が一般的な日常食だった。二〇世紀アメリカの作家、イーディス・ウォートンや、イギリスのE・M・フォスターの小説に登場する貴族や中産階級にも、ポリッジはおなじみの朝食だ。明治生まれの日本人である私の祖父さえ、港町・神戸のハイカラ好みもあって、オートミールを食べていた。

だれのお腹にもやさしい質朴な食べ物なのに、できたての温かい時にさえ冷めた眼で貶められたのは、シンプルであるゆえの不幸だ。とりあえず安く上げよう、食えればいいと、打算や怠惰で無慈悲に味付けされたことも、残念ながら、よくあった。

ポリッジより薄いグルーエル (gruel) として登場するのは、ダイケンズの『オリバー・ツイスト』。孤児院にいた主人公が、腹の足しにならないお粥のおかわりを願い出ると、許しがた

い反抗だと折檻を受けて追い出される。焦っていたのは、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』。主人公は寄宿学校の朝食に出されるが、あまりにまずそうなので、空腹でたまらないのに食べられない。モデルになった学校では、焦げるどころか、不衛生な異物が混ざることもしばしばあったらしい。

英語の俗語では、「くさい飯を食う」を「ポリッジする (doing porridge)」と言う。刑期のおつとめである。イギリスの刑務所の朝食は長らく、オーツ麦のお粥だけだったのだ。ただし二十世紀では、もっと簡単に前夜から準備できるパンやシリアルに変わって久しい。愛らしい『くまのパディントン』に、移民受け入れのメッセージを添えた映画版続編『パディントン2』、二〇一七ではいまだに、それも毎食、料理担当の狂暴な囚人が作り、まずさのあまり対抗するパディントンが描かれたが。近年は、ヘルシーでおしゃれな感覚が加わった。食物繊維が豊富で、ビタミンやミネラルなどの栄養価が高いから、ポディルダーやモデル、女優に愛用者がいる。作り方もいろいろだ。オーツ麦の加工方法によっては、必要な調理といえは熱湯をかけるだけとか、電子レンジ数十秒の加熱のみ。冷たいまま食べることもある。手間をかけるならイギリスの名門ホテル「クラリッジス」並みに、冷水に三時間ひたし、弱火で四十五分煮れば、格段に濃厚で滑らかになる。

オーガニックの豆乳や、ゴジベリー(クコの実)のようなスーパーフードを組み合わせても、芳醇なウイスキーを垂らしてもいい。味付けは塩だけでも、メープルシロップや蜂蜜でもお好み次第。和風や中華風にもアレンジできる。

もう、まずい、貧しいとは言わせない。ポリッジ(オートミール)は豊かで健やか、しかも由緒を味わえる食べ物なのだ。

## ◆鳥を砕く

大橋愛由等

冬を売ろうと  
朝ぼらけの  
吃音を閉じ  
夢に教唆された  
石を揺り動かし  
賢しらな  
三分割の林檎  
語り尽くされ  
干からびた海月  
作為が気づかれないままの  
月の切れっ端  
青にまみれた神託によって  
裁断されたプシユケー  
蛾たちが発酵する  
根のない常緑樹  
などが語り合い寄り合い  
苦甘い風に囲まれた  
放縦なその場へ  
足蹴りされても

何度も向かうその地へ  
含羞の微塵もない  
黒い幡を立て  
螺旋を拒む  
鳥を砕くための  
クチを唱えようと  
慟哭するわたしと  
あなたとの間で  
うづくまる気配を  
吟味したとしても  
影と影が重なり  
風が風を追い  
蜘蛛たちが狂喜して  
すべての序章が  
書籍から逐電するのは  
あの時その時  
逝ってしまったことさえ  
知らずに名を呼び続け  
まみえた部屋Aでかわした  
箴言はいくつだったかも  
思い出せなかつた時でさえ  
かすかに漂っていた玲瓏も  
枯れようとして  
授ける朝の水もなく  
右脚を踏ん張ったわたしに  
たむけられる言葉はない

ひたすらなにもかも  
届かない日々であることを  
あなたに青に伝えても  
どれほど殺伐と  
うづくまってみせても  
ひたひた押し寄せる  
逼迫にたじろぎ  
なんどモードを替え  
闊歩する街を違えても  
すべて囚衣であることを  
気づいているあなたは  
笑いも眉をひそめることなく  
わたしに渡す白布には  
序章に記された  
苦甘い風が封じ込められ  
やがて黒に変異してしまう  
かの地では  
風が鳥を食み  
石が冬に向かつて哭くことを  
知っているはずなのに  
手なづけた蜘蛛たちに  
語りかけることもなく  
立ち尽くすわたしの  
右耳に吹きかけるプシユケー  
は青に満ちている  
のにながらない……

## ◆抜け落ちソネット

大西隆志

何かが足りないのは日差しのせい  
ものの輪郭がはつきりと見えるのにね  
青空は申し分のない広がりを抱えている  
明日の仕事の段取りも問題ない

郊外電車は少しだけ遅れてはいるが  
日々の生活には支障がないかしら  
発車のベルは二回だけ鳴り  
塀の上を歩いている猫に睨まれる

ビスのネジがいつの間にか緩んでしまつて  
落ちてしまったのは少しづつ貯められた時間でね  
気付かない挨拶のように転がつていく

黒く焼け焦げたパンがトースターから消え  
朝食も仕事も抜け落ち、行くあてのなさに驚いて  
ぼくらの思想の受け皿もなくなっているのか

## ◆マインド

高谷和幸

知性の発達には進化によるものと思われ込めてきた。生命体そのものの連続性を見出すこと、困難ではあるがもしもそれがあるとすれば、元あるものよりも進化していると結論したくなる。しかし蝸の知性について、その六億年の連続性が語りを変えることはわたしたちにありえない。抽出した質量という概念ではほぼ人間の腕の太さに匹敵し、ぶら下がり、吸い付く時空間の近接領域に属し、消化器官と排泄器を備え、頭から直接生えた足からの生物学的因果関係で印象が構成されている。この生命は凡そ二年で寿命が終わるが、次の世代へと生をつなぎ樂天的に何万年をただ繰り返してきたと思うのは間違いだ。ダーウィンが信じた遺伝粒子(ジェムジュール)を人間より古い起源を持つ蝸の顔を見て同じように想像することが出来ないだろうか。蝸の死は種的な生き残りに生命を還元するアポトーシスのようなものではなく、死して宇宙の原子に還元する大いなるニヒリズムでもない。死と生はわたしたちと同じく、ある種の区切りをもたらし、その間の集合した記憶の重なり、その中心の穴へ、同一細胞と同一細胞の自然発生的な集積からなる重み、その重力から解放されることだ。しかし蝸と人類は同じ時間のスタートから始まったと思うのは間違いだ。その違いは、青い血液と複数の脳を持つ異星人を見つけると、棍棒を持って追いかける、知性の戦いにある。

## ◆もらいもの

野口 裕

君が持っていた方が良かったらうと  
手に渡されたものは  
絶版書を表紙・本文・奥付すべてコピーして  
まるごと一冊を自作した秘蔵の品

チラシを千切った葉が  
いくつか挟まり そこに  
赤インクの傍線と黒の補筆  
表紙裏には  
小さくくつきりとした蔵書印  
すべてそのまま受け取った

ときおり手にして  
やや幅広の筆跡を眺める

これほどの情熱を  
持ち得ない人間ではあるが  
託されたものはわかる

お返しが重い

## ◆益田つこ通信

元正章

### ▼ 正月あいさつ

<2021.01>

今年度から、年賀状ではなく、このメールにて新年のご挨拶をさせていただきます。

本来ならば、お一人おひとりの方に、年賀状を差し上げるところではありますが、そのために要する労力や時間などを勘案してきますと、もうそろそろ引き際の段階に差し掛かってきたと嘆かざるをえません。

もう20数年前にもなりますでしょうか。手書きからパソコンに移行する時、随分と抵抗感を覚えたものでした。明治維新の「廃刀令」「断髪令」にも似た衝撃でした(少し大袈裟か)。それがどうしたものか、今や四六時中、パソコンと向き合っている毎日に変わりました。一方では、時代遅れにならずにすみませんが、他方では、いにしえのスタイルを崩した軽佻浮薄な文人にと成り下がっています。

昨年、幾人もの知己を天に見送りました。大晦日、グレン・グールドの「ゴールドベルク変奏曲」(1981年録音)を聴きながら、一年の締めくくりとしました。

皆さま方の健康と平安をお祈り申し上げます。

(編集部註/この「益田つこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏(神戸市出身)が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです)



# 神戸詞あしび

146-2020.1.31 大橋愛由等

2021年となり、正月気分がまだ抜けないある日、拙宅の北隣にある公園にふらりと足を向けてみた。

一本の常緑樹に注目する。樹が鳴っている。多くのすずめたちが蝟集していた。葉陰に隠れてその姿は見えないが、チュンチュンという鳴き声だけがかましく聞こえる。いったい何羽いるのか検討がつかないほどその鳴き声の塊は、そこが「集団囀」と呼ばれる場所なのだということがわかる。彼らはコミュニケーションをしているのだろうか。それにしては自分の声も相手の声も聞き取れないぐらいの音の束である。あるいは同時に発語することが目的で、言葉と意味を交換する意図はないのだろうか。

こうした〈群れ鳴き〉を聴いていて考えたことは、詩を発語(創作)することも、〈群れ鳴き〉ならぬ〈群れ語り〉ではないかというところ。つまり一人ひとりの詩人たちは、それぞれの言葉と意味を発しているのだが、詩の周辺のひとたちからすればそれは〈群れ語り〉に聞こえるかもしれない。その詩の群れから読者がなにかひとつの鳴き声・語り(詩)・音を感じてくれたらいいし、詩人たちが一本の常緑樹に寄り添って〈群れ語り〉をせざるを得ない状況に追い込まれているかもしれないという認識も成り立つだろう。

それを〈群れ語り(の詩学)〉と呼んでみた。例として、金芝河の詩(金芝河詩集『五賊 黄土 蜚語』姜舜訳、青木新書1072)を引用してみよう。

野原  
なながここで  
崩れてゆくのか  
ながあんなにわめいているのか  
美しい風のあの白い波はおし寄せて



金芝河

灼けた土をうるおす恨(ハミヤ)の野に

ななが少しづつ、少しづつ崩れてゆくのか (冒頭部分)

もちろんこの個性豊かな詩人の作品を、「集団囀」のごとく群声のひとつの作品として取り扱いたかったわけではない。この詩は、自分たちが所属している共同体の根元のありかである〈集団知・共同体知〉あるいは〈衆としての記憶〉を言語化した作品であることを評価したいのだ。つまり彼が書かんとした詩から発酵されるのは、〈うたの発生〉(なぜ詩というたが生まれるのか)に遡る必然をも想起するからである。

## 〈群れ語り(の詩学)〉 — 少しづつ壊れていく

この韓国の詩人が訴えようとしているのは、自らが置かれた政治的・社会的困難さを直視し、詩の中に呼び込んでいくことだ。「なながここで崩れてゆくのか」という状況に対する現状認識、「ななが少しづつ、少しづつ崩れてゆくのか」といった危機感。こうして詩のなかに表現せざるを得ない切羽詰まった状況に置かれているということ。この作品が書かれたのは、韓国の独裁政権下での民主化闘争の困難さを歌ったものだが、今の日本が置かれた新型コロナウィルスのパンデミックに名を借りた国家による国民統制(プーチン厳令)の今にもそっくりそのまま置き換えて読めるのではないか。詩人というのは、自分たち(地域、民族、歴史)を取り巻く内部の亀裂・分裂を自ら背負い、外部(国家)とのあらいの只中に生きていること、その中から言葉を紡ぎ出していく詩的営為を連綿とつづける責務を負っていることもこの詩から知り得るのである。

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.158  
神戸

2021年1月31日 通巻158号  
発行所/月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等  
maroad66454@gmail.com  
定価 600円(税別)